

## 子どもの音楽教育に現代音楽をどう生かしたらよいか

講師 三宅 榛 名

——去る4月27日の公開講座より誌上紹介——

子どもの音楽教育に現代音楽をどう……という前に、教える側が現代音楽とはどういうものか、ということをもまず知ることが第一段階となる。

現代に生きる人間として、現代の、20世紀の音楽を知らなくてよい筈はない。現代音楽がどういうものか、がまだなかなか理解されていない原因の一つには、教育の場に浸透していない、ということもある。しかし、古典ということは現代に対しての古典なのであって、古典から現代までの流れの中で古典というものを掴むのでなくては本当の意味で古典をわかったことにはならない。

ではどういふふうにして現代音楽は発展してきたのか。19世紀末からの音楽の発展を辿りながら説明していこう。



### ○調性音楽

19世紀末までの機能と声法に基づいた音楽。～調と言える音楽。オクターブに七つの音があり、そのスケールが基盤になる。Cdur なら最初のCの音为中心音といえる。そのためにCから始まってCに終る曲を Cdur という。スケールに1～7までの番号がついていてその各音の上に3和音がある。つまり七つの和音がある。その和音はどういふふうに出てくるかという、三度構成から出来た三和音である。三度構成というのはC～Eの三度、E～Gの三度の三度の三つの音から出来た和音をいう。調性の音楽はすべてこれから出来ている。その中で、スケールの一番最初の音に出来た三和音をT, I(トニカ), といひ、スケールの四番目の音の上の三和音をSD, IV(サブドミナント), 第五番目上の和音をD, V(ドミナント)という。この三つを主三和音という。

何のために主三和音というかといへば、調性の音楽はこれが柱のごとくに出てくるものだからである。

たとえば、「三宅榛名ピアノ小品集」(トンボの表紙の楽譜)の中の「小川」は三度構成の和音から出来ている典型的な例。

もう一つ簡単な例をあげると、モーツァルトの「ソナタ K570 Bdur」(楽譜I)では1～4小節がIの和音、5, 6小節がVの和音、7, 8小節がI, 9, 10がV, 11, 12がI, 13小節になってIVの和音、14小節はI, 15小節はV, 16小節がI, 17小節はIV, 18小節はI, 19小節はV, 20小節はI, という具合にIとIVとVの和音だけで半

ページが作られているわけである。ここに掲げた楽譜の次からは転調されてゆくのであるが、19世紀の前半位までの調性の音楽の場合は共通の和音を使いながら転調していった。Bdur のIVの和音は g-mollの1の和音と共通しているというふうにする。つまり共通和音をたどりながら転調していくのである。

### ○クロマティックの音楽

スケールが半音階的なもの。どの音から始めても皆半音の関係は一定であるのでスケールは同じとな

I (Köchel No. 570)

18. Allegro.

る。エンハーモニックということば、異名同音といわれるが、たとえばレの#の音は、Dis であるし、Es でもある。そこから今まで Es なら Es としか考えられなかったことが同時に Dis とも考えられるようになった。たとえば Es dur の I の Es は同時に Dis でもあるのだから Hdur の I にもなり得る。このように今までは非常に遠い関係にあった調がこのような考え方から簡単に転調出来るということになる。音楽の中での視野が広がったのがクロマティックハーモニーである。

「三宅榛名ピアノ小品集」の中の p.36の「元気にはねる」、一見 Edur に始まり Edur に終わっているようだが中間部で何の調でもない部分が出てくる。又カバレフスキーの「子供のための曲」中にもクロマティックの音楽といえるものがある。ひいてみていただくと調性のものとの違いがおわかりになると思う。

#### ○ポリトータル（多調性）

たとえばストラビンスキーの「ペトルーシュカ」は典型的な多調音楽。Cdur でもあり同時に Ddur でも Edur あるというのが非常に入り乱れて、Cdur とも又他の調とも考えられるというもの。20世紀の初め、特にストラビンスキーに多いという事がいえる。

#### ○調性のあいまい化

なぜ調性があいまいになってきたか、クロマティックハーモニーの発展にともなって、今までの中心音があいまいになってきた。中心であるようでもあるし、ないようでもある。そのために調子をはっきり区別しがたくなってきたということ。たとえば「三宅榛名小曲集」の中の「赤とんぼ」の主題による五つの変奏曲の Var.3 がそれに当たる。出だしが a-moll でもあるし終りが e-moll のようであるし、中間部は cis moll のようであるし、強いて何 moll とは言えない。つまりあいまいなのである。

#### ○無調

調性があいまいになり、そして段々と調子というものが感じられなくなる。調子がなくなる。これが無調といわれることで、よく無調と十二音の音楽とはどう違うか、という質問をきくが無調の音楽に理論的な体系を与えたものが十二音の音楽である。なぜ体系を作ったか——無調になると今までの調性によって保たれた秩序、つまりTからDにいて、S、Dにいて……という柱が崩れてしまった。そのために無調の音楽というのは感覚に頼らなければならず、又曲を短かくして印象の統一をはかる、又は歌を使って文学的な要素と結びつける、というような形でしかあり得なくなった。それで調性音楽に代わる強力な秩序がどうしても必要となり無調音楽が体系化された。

例 「三宅榛名ピアノ小品集」P34「子どものための3つの小品」の中の「水にうつったお月さま」「カノン」

#### ○十二音々楽（組織的無調）——シェーンベルク

お互いの間のみ関係づけられている12の音によって作曲する法。ある音が他の音に対して優位に立たない。どの音も平等。いくら無調だと思ってもたとえば、D音が数多く聞こえればどうしても Ddur に聞こえる。それで音列（セリー）を作った。つまり12の音の一つも重複しないで一つの音列を作る。するとその表を鏡のごとく写して出来る正反対のものが出来る。その二種類のを今度は逆方向から写して二種類の列が合計四種類となる。一つの音列はこのようにして12の音がそれぞれ四種類ずつ出来るから全部で $12 \times 4$ の48あることになる。これをいかに使って作曲してもよくメロディだけでなく和音としても使われる。これによって一つの音のかたよった使い方が防げる。（即興演奏）



#### ○前衛音楽

十二音々楽の創始者のシェーンベルクの弟子にアントン・ウェーベルンとアルパン・ベルクという優れた弟子がいる。ウェーベルンはシェーンベルクの十二音技法のドライな面を

受けつぎ、ベルクはその抒情的な面をついだ。第II次大戦後 Post Webern 楽派ができた。その中にはシュトックハウゼン、ブーレーズ、ノーノがいる。

最後に現代音楽の技術的特質をあげてみる。

1. 調性のなさ
2. 拍子の自由さ バルトークの「マイクロコスモス」
3. 記譜法 五線、小節線がくずれ、音の長さの価値が変わってきた。五線紙以外のもの図形、グラフ等
4. 楽器の新しい奏法、新しい楽器、電子音楽、テープ音楽、ピアノの弦に紙や消しゴムを入れて音色をかえる等
5. 音楽の概念が広がった東洋の音楽